

世紀の大事業 青森・弘前城の曳屋完了

技の継承 決意新たに

青森県弘前市の弘前城本丸で行われた天守の曳屋(ひきや)工事で、現場を仕切った我妻組(米沢市)の石川憲太郎取締役工事部長(40)が9日、米沢市内で山形新聞のインタビュに答え、世紀のプロジェクトを振り返り、技の維持と継承に力を入れる決意を語った。以下は一問一答。

(米沢支社・橋拓)

—重さ約400ト、高さ14層の天守を解体せずに3カ月余りかけて約80層移動させた。100年ぶりの大事業を成功させ、今思うことは。

「無事にやり終え、解放感が一番強い。天守を仮の台に載せ、作業を完了した直後は頭が真っ白になり、その後に苦勞が込み上げてきた」

—その苦勞とは。

「国の重要文化財の天守に傷を付けることは許されず、細心の注意が求められた。工事は観光客や市民が見ている中で行われ、弘前市長が出席するセレモニーやイベントが多かった。そ

米沢の我妻組 石川取締役工事部長に聞く

の日程と工程の調整も大変だった」

—市民の反応は。

「準備期間を含めて約4カ月、弘前に滞在した。市民の多くは、弘前城を自分たちの宝物と思っている。毎日、見学に来る人もいた。地元の新聞やテレビに何度も取り上げられ、街で声を掛けられるようになった。ただ、仕事は5人のチームで成し遂げた。そこを理解してほしい」



技の継承に決意を新たにする我妻組の石川憲太郎取締役工事部長

—米沢市・我妻組

—職人は石川部長が最年長。若い人ばかりで驚いた関係者も多かったと聞く。

「曳屋はベテランの親方が仕切るといイメージを持つ人がほとんどで、『あんちゃん大丈夫か』と言われた。しかし、自分は20年の経験があり、これまで一般住宅から神社仏閣、学校まで約200件の現場を踏んできた。最高で1400トの高校の校舎を曳(ひ)いた実績もある。しっかりとやりますから、見ていてくださいという思いだった」

—技の継承にどう取り組む考えか。

「引き受ける建物は全て違う。構造、周辺状況、曳く距離、回転が必要かどうかなど一つとして同じものはない。だから経験が重要。場数を踏んで初めて、現場に合わせ、技を応用できるようになる。文化財を守るためにも、近代建築を保存するためにも曳屋という仕事をなくしてはならない。使命感と責任感を持って後輩たちに技を伝えていきたい」

概

マイ

年1月

に、山

ナンバ

が9日

交流プ

田市出

務士の

が制度

なけれ

いて講

セミ

だから

た。荒

めた建

か、建

した功

彰状が

県と

会(波

開催。

出席し

年は自

中化が

熟知す